

## オリンピック大学

### 1. はじめに

視察第 2 日目の 3 月 11 日(火)、ソチ駅から南へ 2km ほどに位置する「ロシア国際オリンピック大学 Russian International Olympic University:以下 RIOU)」を訪れた。同大学はソチ大会の準備過程で 2009 年に開学し、ソチ大会に向けた各種教育プログラムの展開、将来的にはロシア国内外のスポーツの発展に寄与することが期待されている。今回は IOC を通じて連絡先を入手し訪問日程を調整し、二人の副学長と戦略課長とともに施設見学および質疑応答を行った。



校舎外観

○担当者:

- ・ Irina Badayan, Ph.D (Head of Sochi Office Pro-Rector:ソチキャンパス担当副学長)
- ・ Nikolay PESHIN, LLD, JSD (Pro-Rector for Research:研究担当副学長)
- ・ Tatyana Pomyatinskaya ( Head of Organizational and Methodological Department:組織戦略課長、ホスピタリティプログラム担当)

### 2. 施設見学

11 時 15 分頃に到着すると、まずはタチアナ氏 (Tatyana Pomyatinskaya 氏) の案内による施設見学を行った。右の写真は、2010 年 6 月 7 日にプーチン大統領とジャック・ロゲ IOC 会長(当時)が、10 年後に向けてメッセージを込めたタイムカプセルである。同氏に案内していただいたフロアには、この他にも RIOU の建設の推移やオリンピックの歴史に関する展示が設置されていた。



カプセル

また、スポーツ相やロシアオリンピック委員会会長の協力を得て RIOU が出版した“Sochi Olympic Legacy”という書籍には、ソチ大会のとくに初期段階における準備状況、および本大会の開催が与えるインパクト、およびそのレガシーについてまとめられている。その他にも、オリンピック開催地域に関する大会後の持続的な発展にも触れており、同書はソチ大会のレガシーに関する唯一の科学的な出版物として評されている。



### 3. カンファレンスホールでのミーティング



施設見学のあとは、ホールで RIOU に関する動画を視聴し、質疑応答を行った。自己紹介ではそれぞれの所属、氏名等を説明し、真田団長が今回の訪問の目的を説明した。

質疑応答では、まず 2013 年 9 月より開始された修士課程プログラム (Master of sport Administration one year programme) に関する話題となった。現在、第一期生としてオリンピックのメダリストを含む 14 か国 29 名の学生が在籍し、10 か国から 18 名の教授陣を抱えているという。また、入学者は世界各国からバランスを考慮したうえで、英語やスポーツマネジメントに関するエッセイをもとに選抜されたとされる。一年以内には、博士課程を設置する予定についても伺うことができた。

次に、2010 年より行われた「ホスピタリティプログラム」の展開について質問を行った。RIOU は 2009 年 10 月に創立されて以来、ソチ大会に向けて地域を対象とするホスピタリティプログラムを開催している。そこでは、例えばイタリア講師を招いてソチのホテル関係者に対するサービス講習を行うなど、要人や観客を含むすべての種類のオリンピックゲストへの対応方法について、国際的な専門家を招いて講習を行ったという。



### 4. 日本からのお土産を贈呈

嘉納治五郎記念国際スポーツ研究・交流センターに関する紹介冊子、CORE の雑誌「オリンピック教育」第一巻に加え、筑波大学概要や関連グッズ、そしてその場で江上氏が書道で「和」の文字を書いて贈呈した。先方からは大学のピンバッジ、記念硬貨をいただき、本ミーティングをきっかけとした今後の継続的な連携を約束した。



## 5. ロシア国際オリンピック大学を訪問して

RIOU は、ソチ大会のオリンピック教育プログラムにおける最も特徴的な取り組みの一つとして、2009 年の創立から多様な取り組みを行ってきた。バツハ会長が訪問した 2013 年 9 月開講の修士課程プログラムに注目が集まる一方で、今回の訪問では 2010 年から行われている「ホスピタリティプログラム」、ホテル関係者等の外国人と接する開催都市の地域の人々に対する教育プログラムに関する説明が非常に印象的であった。

この事例は、6 年後に迎える東京オリンピック・パラリンピックに向けて、開催地のオリンピック教育における大学の役割について「地域住民を対象とした社会教育」という新たな観点を認識させた。各大学は、その大学に属する学生はもとより、近年の「大学の地域開放」の流れに合わせた一般住民を対象とする社会教育的なプログラムの展開が検討できるであろう。とくに、すでに招致の段階で構築されている約 90 校の連携大学は、今後全国各地においてそのモデル校となっていくことが期待される。

そして、RIOU と嘉納治五郎記念国際スポーツ研究・交流センターおよびオリンピック教育プラットフォームの連携に関しては、イリーナ副学長の述べたとおり、「これをスタートとして」具体的な連携プロジェクトを検討していく必要がある。以下に記した RIOU との連携校の中には、IOC のオリンピック研究センターも含まれている。東京オリンピック・パラリンピックに際する国際的なオリンピック教育プロジェクトが具体化していく段階では、日本が RIOU に求めるアイデアを明確にした上で、共同で推進できるプロジェクトを検討していく必要がある。

文責・撮影：大林太朗（筑波大学）

### 【冊子資料より】

RIOU とパートナーシップ協定を結んでいる大学、組織

- ・National Olympic Committee of Armenia (アルメニア)
- ・Kufstein University of Applied Sciences (オーストリア)
- ・National Olympic Committee of Brazil (ブラジル)
- ・British Columbia Council for International Education (カナダ)
- ・Brunel University (イギリス)
- ・IPC Academy (イギリス)
- ・Sheffield Hallam University (イギリス)
- ・University of East London (イギリス)
- ・World Academy of Sport (イギリス)
- ・Autonomous University of Barcelona (スペイン)
- ・National Olympic Committee of Poland (ポーランド)
- ・National Olympic Committee of Ukraine (ウクライナ)